

# 敬語の誤用について

李 玉 節

---

はじめに

- I 敬語の種類
  - II 尊敬語と謙譲語の混用による混乱
  - III 誤用の多い「お」と「ご」の使い方
  - IV 敬語は時代によって変わる
- む す び

はじめに

どこの国でも、習俗や生活様式が異なっても、必ず敬語表現がある。敬語表現というのは、人間関係、すなわち、話し手と聞き手、話題となる人との人間関係によって、話題の内容となる事物、事柄に対し、相手や第三者に敬意を表示する表現を用いることをいう。日本語の敬語表現もその例外ではなく、しかも、それは用法が複雑である。例えば、「松本さんが来ました」は丁寧な表現であり、「松本さんがいらっしゃいました（おいでになりました）」は尊敬を表現する用法である。また、「猫が来ました」の表現は一般に用いるけれども、「猫がいらっしゃいました（おいでになりました）」の用法は使用しない。

これを見て分かるように、話し手と聞き手、及び話題となる人物が、人間

関係のつながりをもっているため、尊敬語が使われるが、法的人格を有する人間ではなく、動物に対しては、「いらっしゃる（おいでになる）」という尊敬語は使用しない。それに、尊敬語と謙譲語の使い分けも複雑で、外国人にとって、日本語を勉強する上で、敬語の使い方は一つの大きな壁だといわれている。

では、日本語において、なぜ敬語表現が発達したのであろうか。坂詰力治氏の説によると、「それは、日本の社会構造に起因していると言える。日本は、いわゆるタテ社会であって、長い間封建的身分制度のもとにおかれ、そこでの社会的・人間的関係は階級・身分の上下によって結ばれていた。タテ社会にあっては、そうした社会的・人間的な階級意識が人々の中にたえず存在していたのである。」<sup>1)</sup>

こうした身分的な階級意識が存在したことから、尊敬語・謙譲語・丁寧語、そして、ビジネス用語、学校用語、新聞・ラジオの用語、皇室用語などが成立したわけであろう。

こういう敬語には、一定のルールがある。例えば、「行く」という動作を現わす用語があるが、これを尊敬語では、「行かれる」「いらっしゃる」などと表現する。謙譲語では、自分を遜って「まいります」「うかがいます」と言う。丁寧語では、話し相手に、敬意を表して、「です」「ます」「ございます」という言い方になる。

しかし、敬語・敬称・丁寧語などというものは、基本原則さえ知っていれば、それがうまく話せるというものではない。いままで、中国人の学生に日本語を教える中で、いろいろな誤用例を見てきた。例えば、「あなたは橋本先生をご存知ですか」と聞かれて、「はい、ご存知です」と答えた笑い話があるが、こういったはっきりした誤用なら、誰でも判断できると思う。しかし、電話で「社長はおられますか」と尋ねる言い方が、誤用であるかどうか、なかなか判断しにくい人が多いであろう。

そこで、本稿では、主として中国における日本語の敬語教育の方法を探求し、実際の日本語教育の中で、学生がよく間違える尊敬語、謙譲語、及び「お」

と「ご」の使い方を考察しながら、その誤用例を分析したいと思う。

## I 敬語の種類

敬語が成立するためには、少なくとも三つの要素が必要である。話し手と聞き手と話題の人物の三つがそれである。話し手と聞き手、話し手と話題の人物の間に、身分や地位の上下関係、ものを依頼したり、利益を受けたりする立場上の強弱関係、あるいは、親疎の関係などがある場合に、敬語が成立する。

敬語は、最も一般的には、尊敬語・謙譲語・丁寧語の三つに分けることができる。

### (1) 尊敬語

尊敬語というのは、話題となっている人物や、事柄に対する話し手の敬意を表す言い方である。例えば

- ・先生、今朝の新聞お読みになりましたか。
- ・あなたはあの映画をもうご覧になりましたか。
- ・今度の研究会にご出席をお願いします。
- ・ご主人はいらっしゃいますか。
- ・かわいいお子さんですね。

### (2) 謙譲語

謙譲語は話し手が自分のことを相手より低い所において、話すことで、結果として相手を敬うことになるという「へりくだる」言葉である。例えば

- ・お先に失礼いたします。
- ・私からうかがいます。
- ・太郎が先生に申しあげます。
- ・私は来月ドイツへ参る予定です。
- ・昨日いただいたお菓子を食べましょう。

### (3) 丁寧語

丁寧語というのは、相手に敬意を表して使う丁寧な表現である。例えば

- ・あれが富士山です。
- ・これは家族の写真です。
- ・雨が降りました。
- ・次は5階でございます。

## Ⅱ 尊敬語と謙譲語の混用による混乱

日本語の敬語には、尊敬語・謙譲語・丁寧語があるため、全体として複雑で、互いに重複していたり、間違いやすい言い方が沢山ある。しかし、その中では使い方が最も難しいのは謙譲語である。自分がへりくだって使うべきものを相手につけたりすると、全く逆の意味になってしまう。その複雑さは、自分、相手の動作の表現に見られる。つまり、相手用（尊敬語）なのか、自分用（謙譲語）なのか初心者にとっては非常に混乱しやすい。次はその混乱しやすい所を三つの部分を分類して考えようと思う。

### (1) 尊敬語と謙譲語の混用

(ア)(a)お客様のお名前は何と申されますか。

(b)田中と申す方からお電話が入りました。

(c)先生がそう申されました。

現在、かなり盛んに使われているのがこうした(a)(b)(c)の「申す」の使い方である。

「申す」は「言う」の謙譲語であり、「私の名前は〇〇と申します」のように、自分にしか使えない言葉である。相手に向かっては、「言う」の尊敬語「おっしゃる」を使うのが正しい表現である。(a)は相手の名前を聞いているから、「おっしゃいます」を使えば間違いはないと思う。(b)は「とおっしゃる方」とするとよいであろう。問題があるのは(c)の「申される」の使い方である。謙譲語の「申す」に敬意を表す助動詞「れる」がつけてあるので、「申される」は尊敬語として、正しいと思いこんで使っている人もあるようである。しか

し、「言う」の交替の尊敬語に「おっしゃる」がある以上、やはり「おっしゃいました」の方が正しく、「申される」は誤用とすべきである。

(イ)(a)東京へはいつごろ参りましたか。

(b)課長は北海道に参ったことがありますか。

(c)社長がこちらへ参られましたら教えてください。

(d)お医者さんへ参られる方がいいと思いますよ。

(e)ただ今、新郎新婦が入場して参りました。

「参る」は「母が帰って参りました」のように、話題の人（ここでは「母」）が「帰ってくる」ということをへりくだって、話し相手に敬意を表す謙譲語である。以上の(a)～(e)のうち、(a)(b)の「参る」はいずれも尊敬語で表現されるものであるが、謙譲語の「参る」を用いている。(a)(b)の例は、「行く」「来る」の尊敬語「いらっしゃる」を使って、それぞれ

(a)東京へはいつごろいらっしゃいましたか。

(b)課長は北海道へいらっしゃったことがありますか。

とするのが適切である。(c)(d)の例の「参られる」は、前の「申される」と同じように、尊敬の助動詞「れる」を用いているので、一目で見れば、正解であるが、実は「参られる」は尊敬表現ではない。ここでは、やはり「参る」の尊敬語「いらっしゃる」を使って、「いらっしゃいましたら」「いらっしゃる方が」とすべきである。

(e)の「参る」の例は、尊敬表現として、「お入りになりました」か、または「ご入場なさいました」としなければならない。

(ウ)(a)そのことは三階の〇〇部でうかがってください。

(b)道がわからなければ、交番でじゅんさにうかがってください。

ここでの「うかがう」は尊敬語のつもりで使われたものであるが、「うかがう」は「先生の所へ行って、おもしろい話をうかがいました」のように、「聞く」の謙譲語であるから、相手には用いることができない。その言い替えの尊敬語はないから、この場合には、「お聞きになって下さい」「おたずねになって下さい」「お聞きください」「おたずねください」などと言えば、失

礼にはならないであろう。

(エ)(a)豊田の野口様おりましたら、三階の事務室までお越してください。

(b)ご両親はあなたの帰りを待っております。

「おる」は「いる」の謙譲語で、尊敬語と混乱しやすい例の一つである。

(a)の場合は、デパートのアナウンスなどでよく耳にする呼び出し方であるが、ここの「おる」の使い方には問題がある。豊田の野口様はお客様であるから、敬意を表すには「いらっしゃる」か「おいでになる」かを使うのが普通である。

(b)の例は先に触れたように謙譲語であるから、「私はあなたの帰りを待っております」は使えるが、話し相手には使えない。したがって、ここでは、「お待ちです」「お待ちになっています」の方が適切だと思う。

(オ)(a)社長は今日海外から帰国いたしました。

(b)松本さん、今年の夏休みはどういたすつもりですか。

(c)ご面会をお断りいたしますか。

これらの(a)～(c)は、いずれも尊敬語を用いるべき所に「いたす」「お……いたす」の謙譲語を使った誤用である。(a)と(b)は「帰国する」「どうする」のは話題になっている社長と話し相手「松本さん」であるから、尊敬語「なさる」で表現すべきである。しかし、「いたす」のこのような使い方は、最近かなり多く使われているようである。たとえば、結婚式の披露宴で司会者の挨拶に、「皆様、まもなく新郎、新婦が入場いたします。拍手をもってお迎えください。」などという言い方がよく見られるということから考えれば、むしろ「いたす」は丁寧語化していると見ることができそうである。

(c)の例は、「お……いたす」の謙譲表現であるが、おそらく「お……いたす」全体が一つの謙譲表現であることを意識せず、「お読みにになりますか」「お飲みになりますか」の「お読み」「お飲み」などの尊敬語と使い間違えて、それに「いたす」を続けて用いたものだと言えるのであろう。したがって、(c)の場合には、「ご面会をお断りにになりますか（お断りなさいますか）」とするのが適当である。(c)の例のように「お……いたす」を「お……になる」とす

べき所に誤って用いることが多く見られる。両者はいずれも広い範囲で敬語表現として使われているが、文法から区別すれば、次のようである。

「お（ご）……になる（なさる）」——尊敬語

「お（ご）……にする（いたす）」——謙讓語

これについての使い分けをしっかりと認識しておくことが肝要である。

(2) 「社内」と「社外」の敬語の使い分け

日本語の敬語には、相手や場所によって、敬語の使い方は変化するという独特の複雑さがあるので、使う時には、非常に混乱しやすいと思う。例えば、「私」と「私以外の他人」の区分があって、同じような区分は「社内」と「社外」、さらに広く言えば、「身内」と「身内以外」の区分がある。この場合、身内には謙讓語を使い、身内以外には尊敬語・丁寧語を使うということは、基本的な敬語のルールである。それが間違っ、逆になると、へりくだるべき所も、へりくだっていないことになる。例えば

「課長さん、いらっしゃいますか」

〈誤〉「はい、あいにく課長さんはいらっしゃいません」

〈正〉「申し訳ありませんが、あいにく課長は外出しております（席をはずしております）」

〈誤〉「社長が今日そちらへいらっしゃるそうですが、よろしいですか」

〈正〉「社長が今日そちらへうかがうと申しておりますが、よろしいでしょうか」

社内の人間のことを社外に向かって言う時には、尊敬語ではなく、謙讓語を使わなければならない。

「僕の会社の社長は、只今海外旅行中です」

「君の会社の社長さんは、只今海外ご旅行中です」

自分の会社の社長さんのことを、他の会社の人に話す時にはこれでよいのであるが、同じ会社の中の人同志で言う時は、相手にとっても社長さんは上司であるので、その社長さんは自分側の人であっても、敬語を使う必要がある。

つまり、会社外の人に話す時は、社長は自分側の人物、同じ会社の人同志で話す時は、社長は自分にも、話す相手にも共通の上司なので、敬語で話すのが正しいのである。

したがって、他の会社から電話がかかって、返事をする時

「社長は只今不在でございます」

しかし、同じ社内の人と言う時は

「社長は只今ご不在です」が正しい。

「社長は今不在ですよ」は社長に対しての言葉が、少しも敬語になっていないので、社員として、失礼な言い方となる。

以上は社内と社外の場合であった。つまり、社内では上司や先輩とのタテの関係で、尊敬語や丁寧語を使った方がよい。同僚間などの横の関係では普通の言葉で無難であろう。

なお、社員の家族に対しては、尊敬語や丁寧語を使って話すのは普通である。しかし、これが混乱しやすい。気をつける必要がある。例えば

- ・「松本はおりますでしょうか」

「只今部長はお出かけになっていらっしゃいます」

- ・「荒木をお願いします」

「お呼びいたしますので、お待ち下さいませ」

また、自分の身内の人を他人に向かって言う時には、やはり謙譲語を使う。

例えば

- ・「父がよろしくと申しておりました」

- ・「この時計は母が買ってくれたのです」

以上の誤用から分析すると、使い方の目安としては、福田建氏の説によると<sup>2)</sup>、およそ次のように考えるとよいのであろう。

- ・上司や先輩に向かって話す時は尊敬語

- ・上司のすることを社外に向かって話す時は謙譲語

- ・同僚などには普通の言葉

このように、日本語には、その時々、相手や場所によって、敬語の使い方



はさまざまに変化するという特徴を持っている。ただし、いずれにしても、普段から「です」「ます」をつけた丁寧語になれていると、いざという場合にもあわてないですむのであろう。

### (3)二重敬語

二重敬語というのは、即ち敬語になっている言葉の上に敬語を重ねることである。この二重敬語になりやすいものについて説明すると、尊敬を表す助動詞の「れる」「られる」である。尊敬語の「お……になる」と一緒にやたらに使うと、二重敬語になってしまう。

〈誤〉「部長がおっしゃられましたように」

〈正〉「部長がおっしゃいましたように」

〈誤〉「お出かけになりました」

〈正〉「お出かけになりました」

なお、よく間違える使い方の中の他の一つは、即ち敬語になっている言葉の上に重ねて「お」や「ご」をつけることである。

〈誤〉「どうぞお食事をお召し上がって下さい」

〈正〉「どうぞ食事を召し上がって下さい」

〈誤〉「ご飯のお替りいかがですか」

〈正〉「ご飯のお替りいかがですか」

「召し上がる」という言葉は「食べる」という言葉の敬語で、その上に「お」をつける必要はない。「ご飯」も「ご飯」で十分である。

## Ⅲ 誤用が多い「お」と「ご」の使い方

敬語は場合によって変化する。こういう場合に必ずこういう言い方だというはっきりした原則がないようである。それだけに、間違った使い方が多くなる。その間違いの多い例の一つは「お」と「ご」の使い方である。

一般的に「お」と「ご」の使い方には、一定の基準があり、「お」は訓読みの和語に、「ご」は音読みの漢語につけるのが基本的な原則である。では、

「お」と「ご」をつける基準は何であろうか。例えば

- ・和語—お宅、お手紙、お知らせ、お名前、おしるし、おくやみ
- ・漢語—ご両親、ご意見、ご心配、ご説明、ご住所、ご家族、ご連絡

しかし、無差別につけてさえおけば、相手に敬意を表すことになるかという、そうでもない。相手の所有物、動植物などにはつけないし、自然現象にもつけない。そして、使いすぎてもいけないのである。例えば

「お宅の猫がお亡くなりになりましたそうで」

「お宅にすりがお入りになりましたとか」

「部長さんのおかばんは、私がお持ちいたしまして、お車までご案内いたします。お足元にご注意なさいまして、おいそぎをお願いいたします」

いくら相手側のことでも、猫の場合やすりの場合などは「お」をつけるのはやめた方が自然である。つまり、あまり使いすぎると、いやらしさが感じられる。

では、「お」と「ご」の実際的な使い方はどうしたらよいか。敬語には尊敬・謙譲・丁寧語があると以上述べたが、その三つの点から考えてみよう。

#### (1) 尊敬を表す「お」「ご」

相手に関係のある物事や行為につけて、尊敬の気持を表す。つまり、「あなた」の意味になると考えて理解しやすい。

「ご意見を聞かせて下さい」

「お宅はどちらですか」

「お電話ありがとうございました」

「ご出席をお願いします」

「お忘れ物はありませんか」

「ご賛成の方は署名をお願いします」

「社長、お帰りですか」

#### (2) 謙譲を表す「お」と「ご」

自分側のことであっても、相手に対してする物事や行為につけて謙譲の気持を表す。

「つまらないものですが、ほんのお祝いのしるしまで」

「お手紙をさしあげてもよろしいですか」

「戻りましたら、お電話を差し上げます」

「簡単にご説明いたします」

「ご案内させていただきます」

「ちょっとご挨拶を申し上げます」

この場合の「お祝い」「お手紙」「お電話」「ご説明」「ご案内」「ご挨拶」は話し手側の行為や、話し手側に属するものだから、尊敬語とは言えない。自分側に「お」や「ご」をつけるのはおかしいようだが、それが手紙を書くのは、電話をかけるのは自分であり、もらうのは相手であるから、こういう言い方も使えるのである。

### (3)丁寧語（美化語）としての「お」「ご」

この美化語は、従来の敬語の三種類では、丁寧語に属するものである。美化語とは、自分の言葉を上品、きれいにする敬語である。丁寧語の場合は、聞き手に対する敬意がはっきりと含まれているのに対して、美化語の場合には、聞き手に対する意識が稀薄で、自分の言葉の品位、美しさのために使われるもので、丁寧語とは使い方では違うものだと言える。

「お値段はいくらぐらいですか」

「一緒にお話をしましょう」

「どうぞ、お食事を召し上ってください」

「お野菜はよく煮こんでください」

「お手洗はどこですか」

「彼女はこの5月にお産をするそうです」

「お菓子ありがとうございます」

「お湯が冷めてしまいました」

これらの「お値段」「お話」「お食事」などの「お」は付けても、付けなくても、それほど違いは感じられない。食べものにはよく「お」が付けられるのは一般的である。しかし、「お」「ご」の使い方から見れば、使ってよい場

合と、使ってはいけない場合があるので、誤りやすいのである。次はその使ってよい場合と使ってはいけない場合を考えて見よう。

日常での「お」のつくことは<sup>3)</sup>

おかず、おしゃべり、お礼、お茶、お昼、おしゃれ、お産、お手洗、おかずなど

つけずにすませるもの

寺、中元、仲人、米、うどん、塩、豆、酒、食事、すし、台所、風呂、便所、こたつ、なべ、店、勘定、友だちなど

「お」「ご」をつけないもの

①外来語にはつけない

コーヒー、ブラウス、サッカ、ビール、タバコ、アパート

②公共物にはつけない

電車、学校、教室、机、会社

③自然現象にはつけない

山、川、河、土地、台風、雨、雪

④動物、植物にはつけない

犬、猫、牛、馬、猿、象

花、木、草、葉、枝

⑤食物、調味料にはつけない

レタス、トマト、人参、玉ネギ、にら、砂糖、みそ、こしょう、しょうゆ、粉

⑥病名にはつけない

頭痛、胃潰瘍、けが、ガン、エイズ

「ご飯」「ごちそう」「おはよう」「ご苦労」などの言葉は慣用語として昔から使われてきたから、「お」「ご」を取ってしまうとおかしくなるから、そのまま使うのは普通である。

#### Ⅳ 敬語は時代によって変わる

現在、人類の生活は逐々に変化している。情報時代とか、コンピューター時代とか言われ、生活様式もどんどん変わってきている。言葉というものは、人類の生活の中から生まれるものであるので、生活が変化すれば、言葉づかいも変わってくる。敬語も例外ではないと思う。

昔は封建制度で、身分の上下によって、人間関係が結ばれていたが、今は、敬語は美しく洗練された言葉の一つとして使われている。つまり、使う人自身の教養の高さを示す時代になったのである。特に、「お」と「ご」は美化語として、女性に愛用される傾向が強いようである。

その一方では、「近ごろの若者は敬語が使えない」「女性言葉が消えていく」などとよく言われている。特に若者どうしは目立つ。例えば、従来、女性がよく使った「～わよ」「～のよ」「～だわ」「～わ」などはあまり聞かれなくなった。代わって、「～がさ」「～だ」と言いたいままで女性が使わなかった言葉が出ているのである。その背景には、女性の社会進出が進んだことがある。今後、時代の変化によって、新しい「女性言葉」「若者言葉」が生まれるのであろう。

では、これから、敬語はどのように変化するか、文部省昭和二十七年発行の『これからの敬語』の四つの基本方針を引用して、終りにしようと思う。

(1)これまでの敬語は、旧時代に発達したままで、必要以上に煩雑な点があった。これからの敬語は、その行きすぎをいましめ、誤用を正し、できるだけ平明・簡素にありたいものである。

(2)これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない。

(3)女性のことばでは、必要以上に敬語または美称が多く使われている（たとえば「お」のつけすぎなど）。この点女性の反省、自覚によって、しだいに純化されることが望ましい。

(4)奉仕の精神を取り違えて、不当に高い尊敬語や、不当に低い謙遜語を使うことが特に商業方面などに多かった。そういうことによって、しらずしらず自他の人格的尊厳を見うしなうことがあるのは、はなはだいましむべきことである。この点において国民一般の自覚が望ましい。

## む す び

以上、四つの項目に分けて、敬語の種類や、尊敬語と謙譲語の混用による混乱を検討し、さらに、誤用の多い「お」と「ご」の使い方や、敬語の変化についても、考察してきた。本稿を書く当初では、「敬語の誤用」だけでなく、敬語の歴史的展開についても解明しようと考えていたが、紙幅の制約もあって、今回はこれを割愛することにした。他日を期して、この研究を完成したいと思っている。

## 注

- 1) 坂詰力治『敬語思いやりのコミュニケーション』(有斐閣新書1985年刊) 24ページ
- 2) 福田 健『敬語がスラスラ話せる』(エール出版社) 165ページ
- 3) 同上, 176ページ~178ページ参照

## 参考文献

- 堀川直義, 林 四郎編著『敬語ガイド』(明治書院, 昭和59年刊)  
三省堂実用『エチケットの事典』(三省堂, 1991年刊)  
『外国人のための基本語用例辞典』(文化庁, 昭和50年刊)  
NHK テレビ『実践はなしことば』(日本放送出版協会, 平成3年刊)  
洪沢多歌子著『ことばのエチケット』(青春新書, 昭和46年刊)